



亀井少梨使用衣類の端切れ (少梨『衣類大数備忘』貼付)、少梨の覚え書上段左から「紺二白ノ堅縞」・「紺白團七」・「紺黒團七」・「紺千羽サントメ縞」・「茶紺サントメ」・「紺花色同」・「紺形付」・「木綿紺縞」・「木綿藍ひろと」・「木綿納戸」・「浅黄しま」・「両羽織」

閨秀 亀井少梨伝 (出) 庄野寿人

亀井家の正月・父の勤勉と酒・少梨おめでた

文政五年(一八二二)元旦。雷首、少梨夫妻は父昭陽と同居して初正月を迎えた。以後、しばらく父昭陽の空石日記によって少梨を語ることにする。

元日、東の方向かすかに明るむ頃、末弟、脩三郎の躍然先起(飛びあがるように元氣よく家族に先んじて起床した)の記事に始まる。

脩三郎が自分で井戸の初水を汲むころ、ようやく家人が起き始めた。脩三郎は初水を神仏それぞれに供えたと自分の姿勢を正し、父昭陽に祝詞を述べた。

長男義一郎は、大福茶(正月・大茶碗に濃茶を点て、回し飲みする)を祠堂(孔子聖像を安置)に献じる。



少梨「大黒天図」扇面 1854年・56才作

これに在塾で越年した書生たちは義一郎の背後に列座、拝礼した。是歳、余(父昭陽のこと)五十才、内氏(母のこと)四十五才、友(少梨)二十五才、敬(妹)二十三才、弟義一郎十八才、鉄次郎十五才、妹世十二才、宗九才、脩三郎六才、こうした父以下家族の年令順記録は父の空石日記に定形で続けられている。

次妹の敬と長弟義一郎の五才ひらきは、早世した妹のためで、八人姉弟は長子から三子まで二才ずつ、四子からは三才おきである。亀井家系は昭陽が最も子福者。これは夫婦和合、家庭円満による。父には、とかく儒学者に見られる堅苦しさがなく、とくに母への思いや

写真 杉山謙

りが深い。

また、武士社会の通弊で母を束縛することも無い。祭祀、芝居見物の気晴らし、料理茶屋に、別府温泉まで一ヶ月の湯治旅行もさせる。

亀井塾の最盛期は、在塾生三十余名。下婢三名を使っても母の気づかいは大変であった。このため多少の余裕があると必ず母に実家帰りなど自由にさせた。

甘棠館焼失と閉校以後、亀井家塾として、いまの百道新地に移るまでの塾生は少なく、いまでは在塾十数名となり、その半数が出身遠地のため在塾越年している。この書生たちは亀井家の家族同様に正月をさせる。

いま亀井家は一僕二婢を置く。

子女の幼少時は必ず乳母を付ける。

父にも長い年月の疲労がある。酒で気をもたせながら、塾の教育は少しも油断なく、早朝講義と午前は通学生を合わせ集中講義。午時の休息後は習字、夜は会話をさせる。

父は、藩士の気がまえも固い。このため父所属の城代組々頭の衣非氏の信頼が篤く、父の学問と塾教育にも理解を得ている。最近、父の書について藩重臣からの依頼も多く、これは祖父南冥の時代をこえるものがある。また来訪者も多い。

こうした多忙の合間を惜しむよう

に父は学問に出精、その成果を著述にする。疲労は酒にまぎらわし、気を許す相手があると深酒になるが乱れず、時刻にかかわらず寝込むのである。このため夜中に目覚めると深夜でも必ず机に就く。

去年の夏、雷首と少槲が生月旅行に出発した直後の父発病は、こうした父の無理が重なったと思われる。

秋になって症状が軽快。年末十二日、父の排尿量記録もやむ。酒量も以前に比べ少なくなつたようである。

夫の雷首は、元日早朝に井原の生家に往き午後帰宅した。待ちかねていた父は日記に「午後与山人小酌微醺」（ひる時、山人と軽く一杯、すぐほろ酔いした）と記入している。

末弟脩三郎と妹の世、宗、これに書生たちも一緒に、近くの紅葉八幡に詣でた。しかし折悪しく雨から雪に変わり、風も出て寒さがひどく、まもなく全員が帰宅。

特記することは、父が五十才の新年を期し、雅号を「天山遯者」に改めると宣言。これで父の号は昭陽に始まり、次に空石幽人を号し、いま三度目の号になる。但し、記録を続けている空石日記は、このまま空石題で通すという。

元旦は、天候の急変もあって年始

客は少ない。父末弟の大年（文化九年没）遺子晟十九才と、父妹婿で山口白賈の長子駒太郎が年始に来た。

この両人は、少槲の従弟である。

父は、駒太郎を最も嘱望しており山人と駒太郎を加えて酒にしたいようであったが、同人は父白賈の家督を嗣いで役職に就いており、役筋に廻礼を急ぐと辞退する。

夜に入って、東方に火の手が見え人も走る様子である。亀井家は二度の火災を経験、火事には神経過敏である。義一郎が表に出て山人と二書生がつづいて走った。

結果は、荒戸三番丁の佐藤三六という馬廻組士で四百五十石家の全焼でとまったという。この火事騒ぎで、家人は丑の刻（午前三時）に寝む。

少槲夫妻は別棟の好音亭に入る。

七日未明に妹世が起床、七草菜を調子のよい音をたてて叩いている。少槲も自分の好音亭から母屋に出て七草汁づくりを手伝う。

朝食は、世が用意した七草汁に餅を焼いて加え、これに塩鱈、かつお菜の煮込みを皿に盛って書生たちに供する。また亀井塾の向かい家（染物屋）の家人を例年通り招いて一緒にの食膳にした。これは、少槲がもの

心ついてから二十年余のしきたりである。この紺屋（染もの屋）夫婦は、

亀井家が百道に移る以前の住人で、いつの間にか塾生たちが、なにかと便利にする存在。いまや亀井塾に風情を添えている。亀井家も家族なみに、とくに母には良き協力者である。

この年は閏年で、一月が重なる。父の調子は以前にもどる。塾教育、自分の勉強と著述、揮毫と習字帖づくり、訪客の応対で寸暇もない。

閏一月十七日、父日記「午後礼記会、会后殆倦与山人飲忽得氣力夜案至三更」（午後礼記を会読する。会を終えると身体が倦んだ感じであるが山人と酒を飲むと忽ち氣力を回復、夜の案に就き三更（午前零時）に及んだ）としている。

夫の山人も酒は好き、父の家に移ってから夫の酒量も回数も以前に増しており、これが少槲の不安である。

さらに廿二日の日記には、父が礼記の講義を終えた後、自分の部屋に

戻ると、そのまま手枕で横になり机の側で眠りこんでしまう。夜、井原の茂十が来たのに目覚め、好音亭に移り山人と三人になって飲む。その後、著述の校正にかかり午前二時過ぎまでする、と。

父は己も人にも行儀は厳しい。家

人にも父が手枕で横になるなどは見られないことである。この日のことは、父の疲れ、身体が弱っているためと思われる。

少栗の夫、雷首も酒で行儀をくずすことはない。

この夫が、腰の脇差しを失くして帰宅したことがある。武士の体面にかかわる重大な失態にされる。幸いに懇意な館儀儀助方に置き忘れており、儀助が走って届けてくれたのであるが、これも酒のせいにはされる。

七月十三日、末弟脩三郎、死去。

九日に吐き気を訴え、そのまま急症を呈して五日目に亡くなった。

父は、わが家の主治医にする博多の生民が日に数回の来診を欠かさず、半ば安心していた。死の前日に容体急変、その苦しきためか激しく反転をくりかえした。父が思わず、どうしたのかと言うのに、横から少栗が病のせいでしょう、と。その後、生民が「危篤」を告げた。

脩三郎は、父の元日記事に見られる通り、教えられたことは子どもと思われないほど厳格にする。聡明利発で学誦に抜群の才を見せていた。

父は脩三郎の死後、日をおくほどに哀惜が強く「孝鳥神童」と呼んで「傷逝録」上中下三巻と付録を著わ

すことになる。これは父の文学的作品の一つ「烽火日記」に並ぶと評された。この両書とも少栗は精写する。

この年は、義一郎も鉄次郎も病む。

義一郎は、出張講義を始め、その回数には博多の松永子登郎に於て「莊子」を二月に開講、回を重ねていたが四月に入って健康不調が見えた。生民診察で、美食、舎業（講義）を

休み、暫く撰生と休養をするよう、宣告されていた。

また、生民は少栗の夫雷首にも強く禁酒を勧告していたが、本人は医者の不養生と苦笑するだけであった。

ただ義一郎が担当する塾生の朝講を山人が交替、講義中に不快を呈して、少栗が終日看護した（十二月七日記事）ことがあった。

翌文政六年、七月十六日。福岡藩に長崎奉行から昭陽書二枚、少栗の書画各一枚の作品要請が伝えられた。とくに少栗指名は長崎奉行の懇切な依頼であると付言された。

当時、すでに少栗の名声は『画乘要略』白井華陽・天保二年と『古今南画要覧』嘉永六年刊に登載される。

前書に曰く「少栗は亀井元鳳の女なり。書を能くし詩に巧みなり。傍ら墨竹を写し、瀟灑にして愛すべし」（原漢文）と紹介されている。元鳳

は父昭陽の字である。

十月、夫の雷首、病床に就く。生

民医の戒告を無視したことが悔やまれる。生家の長石村（いま糸島郡二丈町）別荘に移る。歩いて一日の行程である。

文政七年二月、夫の病氣癒え、父の百道新地に帰る。父昭陽の意見で

長婿健康のため同居を不可とし、夫に移転を促す。

三月、少栗に妊娠の兆しを見る。結婚八年目である。

四月五日、夫妻今宿村に移宅。書生を以て長垂山におくる。今宿の手前、海岸に沿う低い峠が長垂である。（以下次号）

平岡浩プロフィール

画家、昭和21年7月3日生まれ。45才、太宰府市在住、昭和54年、ペン画集『四季の詩』出版。

四季折々の日本の風景を描いて12年。常に変動している自然をキャンパスに写そうと画業に励んでいる。

※昨年12月9日放送のRKBテレビ『ニュース5』の中で、平岡浩ペン画カレンダーの希望者を先着30名様に限り募集したところ、四百名近くの方々からお電話・お手紙によるご応募をいただきました。できる限りみな様のご要望にお応えするつもりでしたが、在庫切れによりしめらせていただきました。この場を借りてお礼とお詫びを申しあげます。



今回初めて能古博物館オリジナルのカレンダーを製作いたしました。平岡浩先生の萱葺き、土壁づくりの昔懐かしい家を描いた詩情あふれるペン画が好評で、みな様より多数のお問い合わせをいただきました。

予 告 亀陽文庫創立20周年記念 江戸後期 筑前閨秀 — 亀井少梨 — 展

本誌好評連載中の亀井少梨を中心とした「江戸後期筑前閨秀展」を今年春の企画展として開催することとなりました。少梨は、亀門学の大儒・昭陽の長女として学問に励み、自らも家塾において教鞭を執ったといわれます。これは女性の社会進出が常

識になかった当時としては希有のことであり、注目に値する存在です。少梨詩書画三絶の技を同時代の閨秀作品とともにご鑑賞いただき、遺された生活記録からは、人間少梨の姿を垣間見ていただきたいと思います。

亀井少梨

竹画(95.5×36.2)
仙崖賛、少梨画



くさきの火災で類焼した西学問所再建を取りやめ、西学訓導であった父昭陽は教職を解かれ平士に編入されてしまう。当時は亀井家にとつてまさに苦難のときであった。

このような境遇の中、少梨は幼い頃より家学を修め、その早熟ぶりで人々を驚かせた。闊達な性格で父には殊に愛され亀門の講義を助けるまでに成長、父著述の浄書を熱心に務めた。

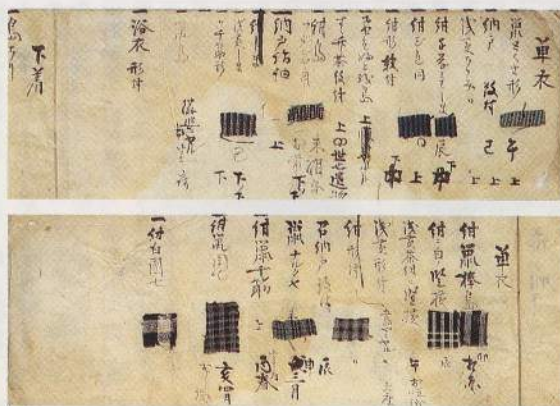
少梨は十九才で昭陽門下で医術を継ぐ三苦源吾と結婚するが、その後も亀井姓を名のり、家庭を守る一方で、学問に詩書画にその才能を発揮した。遺作品からは精神的に亀井家を支えていたであろう少梨の気丈さがうかがわれる。

少梨の誕生は、唐人町の火災で亀井家が類焼、お産をひかえた母が実家に仮寓していた一七九八(寛政十)年二月十九日のことであった。当時亀井家は、亀門学の祖であり福岡藩西学問所の学長を勤めた祖父南冥が寛政異学の禁により蟄居中の身で、亀井家としては失意の時であった。そこに追いうちをかけるこの火災であったが、さらに同年六月藩は同じ

●「衣類大数備忘」

少梨の詩書画については、当誌でも再三紹介してきました。しかし今回「江戸後期筑前閨秀展」ではまさに少梨の生活記録として興味深い資料を出展します。

その一つが、左写真の長帳で、表紙には、「衣類大数備忘」と表題が



少梨「衣類大数備忘」表紙34×12.2cm(左)とその中身
端切れが貼付されているのがわかる。

つけられ、「丁未正月 友」と記されています。一八四七(弘化四)年正月、当時、少梨五十才の記録であることがわかります。「少梨」という名が一般に親しまれていますが、「少梨」は雅号であり、「友」という名が生まれたときにつけられた名前です。この長帳には、ページごとに「帷子」「帯」「袷羽織」「単羽織」等の項目がつけられ、正確な品物名と、入手先・入手日等が記述されています。さらに、その品が一目でわかるように端切れを貼付するという几帳面さには驚かされます。

才媛として知られる少梨ですが、生活感あふれるこの資料を初めて手にして、一人の女性として、違った角度からその魅力を感じました。きっかけと家庭を守る姿勢が、人間としての自信となって、作品や彼女の学問に対する姿勢へとつながっているのでしょう。

地に足のついた生き方、そんな姿を思いましました。是非間近にご覧ください。



能古博物館だより

晩年は、五十五才のとき亀門学をともに支えた夫を亡くし、その後一八五七（安政四）年七月六日今宿の自宅で静かに息を引きとった。享年六十才であった。

一人娘は早世したが、甥にあたる永之進が養子となり、少栗の熱心な教育の甲斐もあって家業の医を継いだ。このため同家は少栗以来の資料を当代（亀井准輔氏）に伝える。

一川玉篠

桜花図（132×99.6）
相近賛、玉篠画



玉篠はその相近のもとで詩書画の道に研鑽をつんだ。姉鶴子が相近の内事秘書的な役にたずさわったのに比して、玉篠は外事秘書的な役にあつたと言われるように、温順な姉と対称的に活発で男まさりの人であつたらしい。

遺作品からは、玉篠のその男性的な気性がうかがわれ、父賛に娘画という作品が多く遺されていることからは、玉篠が父をいかに敬慕していたかわかる。

二川玉篠（瀧子）は一八〇四（文化二）年二川相近の二女として生まれた。

父二川相近は代々福岡藩御料理人の家に生まれるが、幼ない頃より亀井南冥に師事、亀井昭陽とともに亀門の秀逸と称された。十七才で御料理人としての家職を継ぐが、ある時から書道に励み、福岡藩に書家として召し抱えられた人である。

玉篠は一八六五（慶応四）年に六十一才でその生涯を閉じた。

江戸後期筑前閨秀展

（勸亀陽文庫能古博物館主催）

期間 平成四年四月七日（火）～六月二十八日（日）（月曜が祝日の場合はその翌日）

共催・協賛 福岡市・福岡市教育委員会・福岡県・福岡県教育委員会・西日本新聞社・TNC放送局・NHK放送局

入場料 一般五〇〇円、高大学生・六十五才以上二五〇円（上記期間中のみ）
入館時間 九時半～十七時（入館は十六時半まで）

※少栗・玉篠を中心とした筑前閨秀に関する情報・資料の提供など、皆様のご協力をお願い申し上げます。

江戸後期筑前閨秀展鑑賞の予備知識

●亀井学

徂徠学派の流れにある古文辞学である。古文辞学派は宋儒（朱子学）の解釈によらず、道をあきらかにしているのは孔子の言行を記した『論語』であり、これを古言で解釈することにより聖人の道をあきらかにしようとした。

●祖徠学
朱子学派の、人々が道德的修行を積みさえすればおのずから理想的な社会状態が現出するという楽観的な天下太平論では封建体制は行き詰まるといふ、きびしい認識が祖徠にある、それに立ち向かおうとする真摯な使命感の中から祖徠学が生まれた。

「礼楽刑政のほかに道というものは無い。」道とは抽象的な理念ではなく政治こそが道の本質であると説いている。人間的情意と欲望を認識し、一人一人がその気質を存分に発揮した社会を肯定した。

●寛政異学の禁

寛政の改革の一環として、寛政二（一七九〇）年五月幕府は林家塾に

対し朱子学以外の教授を禁止した。このことが各藩にも影響を及ぼした。

●詩書画

蘇東坡が「詩尽くすにあたわず、溢して書となり、変じて画となる、みな詩の余なり」といったように、詩書画は文人画において三位一体であるといわれる。三位一体とは、書も画もいわゆる詩情のあらわれであり、詩と画は相通じて緊密に結合し、書は単に賛としての詩文を書くばかりでなく、画法との一体化をなし遂げるといふことである。詩書画の三絶は、文人画の理想である。

●四君子
（中国の絵・日本画で）蘭・竹・梅・菊。高潔な感じが君子を思わせるからという。文人画によくつかわれた題材である。少栗は四君子のほかに、風景、生物、人物とあらゆるものを自在に描いたが、あくまで詩を本意とした。

参考文献

日本の美術23 「文人画」、吉川弘文館・国史大辞典（学芸員 松尾由美子）

原題「真翁聞きがき」

真翁銅像ものがたり (九)

- ・合同・大合同日魯漁業誕生
- ・本社丸ビル移る
- ・危うし、総理の会社乗っ取り
- ・国士杉山茂丸

大正五年(一九一六)。わがべーリング漁業が租借契約する露領漁区はカムチャッカ半島西海岸オバラと東海岸ナラチエフの二漁場、これにナラチエフ河口に位置する好条件漁区を持つ露人漁業者からの買漁を合わせ三漁区以上の生産実績をあげた。すでにサケ缶づくりも三年目。製品すべて三井物産渡しで、わが社の仕入資材、資金にも不安がなく、世界大戦による軍需景気は予期以上の収益をもたらした。これで会社資本金十万円に七五%を払込済とし、無借金経営を可能にしている。

年末、対独講和の兆しが見え始めると、早くも世界的に諸市場の低落が報じられた。

翌六年、ロシア革命が勃発。これは、以前、川上総領事の予測事態であると直感、日露漁業協約に影響を警戒する必要を考えた。

まず、露人漁区の経営者は、社会主義による私企業の没収が噂されているという。しかし、日本人契約漁

区に対しては、さすがに直接干渉はないが、契約租借料には暴騰に近い操作が加えられた。その理由とするところは、革命によるロシア通貨ルーブルの暴落が日本人の漁区租借料を割安にし、それだけ政府の損失を大きくしている、一応もともとな主張である。これで漁区入札最低価を従来落札平均の六倍に制定すると通告された。なお入札後もルーブルの低下に対処した値上げ改訂を通告請求する。これに応じないと漁区契約は無効。直ちに現地の操業停止を求めるといふ。

またロシア国内情勢も、革命軍に



昭和10年 (元帥服といわれた日魯の制服着用)

一般民衆まで加わった暴動が随所に発生。これは、北洋漁場のカムチャッカ州にも見られ、なお漁区巡回のロシア官憲による便乗的で行き過ぎた取締りが行われた。このため操業現場における紛争、混乱が頻発し北洋漁業の経営に大きな不安を生じている。

こうした情勢の悪化は、北洋漁業中小事業者に合同機運の切迫をもたらしした。

ぼくが、かねて北洋漁業界の大手にされる堤商会の平塚氏から合同勧奨をされたことは既述の通りである。

当時、邦人の北洋漁区の租借契約状況は、十漁区以上保有が五社、五漁区以上が四社。以下は六六者が一四三漁区を保有、これを合同対象とするが、この中には立派に安定経営される業者も多い。一例は、函館の小熊幸一郎氏である。漁業経験も

深く、カラフト漁場からカムチャッカ出漁に及んで、資金も豊かで、よく小規模漁業者の援助に応じ徳望家で知られる。しかし、ロシア革命後の北洋漁業は資本以外の諸問題が多く、北洋の国益と現場の安全を守るためには大同団結して日本政府の指導と援助、これに強力な外交による対露方針が望まれる。

ぼくは、小熊さんを中小事業者の合同トップに据え、勸察加漁業(株)、資本金五百万円(第一次払込二百万円)とし、第一次の合同参加九者、漁区数二一を集約。小熊社長、袴信一郎専務、真藤常務、ほか六事業者は取締役、監査役とし、なお堤清六、平塚常次郎の両氏は非常勤取締役にした。この両氏は堤商会として業界最大手で次の大合同を考えた布石である。九年三月発足、直ちに出漁操業に入った。

世界大戦後の経済沈下は甚しく、金融は全面大恐慌を呈している。さすがの北洋漁業基地「函館」の水産市場も、金融不円滑。塩サケ、マスの国内売行き不良、輸出商社による大陸市価も下落を呈し、わずかにサケ缶のロンドン市場だけが比較高値である。勸察加漁業の翌十年三月決算は、八万円の純益にとどまっ

能古博物館だより

た。この成績でも函館の話題になつたが、ほかは赤字が多かつたようである。東北地方の農村不況がひびき塩サケの売行きも伸びなかつたという。

当社と前後して堤商会は「輸出食品」と合併し同社名を名乗つた。これで「日魯漁業」と、わが社「勘察加漁業」、「輸出食品」の三社が、北洋漁業の三大企業とされ、日魯を除く二社による小企業の買収、併合が進行していった。

十年三月、三大企業の大合同に飛躍した。これで「日魯漁業」を大合同と共に新社名にした。旧日魯漁業は、全株式譲渡と株主総退陣で会社名も消えたのである。これで、以前の日魯を旧日露と呼び、われわれは新日魯を自認した。

ロシアルーブルの下落は、大正八年が最もひどく十分の一に暴落。十年から正常に戻り始め十一年は以前に戻つたが、漁区租借料は旧帝政時代の三倍にとどまり、これは革命政権の策略が奏効、わが方は泣き寝入りさせられたことになる。

革命ロシアは、日本軍の大正七年シベリア出兵に対し反発的になり革命政権官憲の感情的な制約を受けることになつたが、これらを柔軟にこなし、国益事業を守ることができた

のは大合同による統制の効果であると思う。従前の中小乱立の状態では、とても対処されない事態が発生したと考えられる。

大正後半期から北洋を含む日本水産業は着実な上昇と繁栄が見られるが、この中で日本政府は北洋漁業の操業に対し、ロシアバルチザン蜂起に海軍艦艇の派遣による保護を行つた。これによって、われわれ漁業者は自衛出漁宣言と規律のある状況維持を努めたのである。

シベリア沿海州方面に戦艦「三笠」カムチャッカには「新高」と「石見」これらは特務艦数隻を随伴した艦隊行動とされる時期もあつた。現代では、とても考えられないことである。なお、日魯漁業は合同によるサケマス漁のほかにかニ工船を包轄し、その事業も行つた。これは合同参加者にサケ漁、カニ漁の兼業があつたことによる。

大合同の日魯漁業新役員は、取締役会長に堤清六、社長は空席とし、専務取締役に檀野礼助氏を迎えた。こうした役員人事には一切、ぼくの関与することではない。檀野専務は偶然、ぼくが大正三年に自所有のオハラ漁区に缶詰生産を考え、ウラジ

オストックに長期租借契約を更改し

帰国する途次、頭山先生を訪ねて御不在、さらに杉山茂丸さん宅に推参して、良い指導者を紹介しようとして山邸で初対面。以後、檀野さんの斡旋で、ぼくに三井物産取引をもたらしした恩人である。新日魯漁業の重要役員として再会を得、ぼくは我が社「日魯」の将来に大いに曙光を見る思いと、人生の奇縁を感じたのである。

やがて、日魯漁業は北洋漁業における漁獲量の七〇%、また製産に於ても八〇%という独占に近い業績を得る。

大正十二年、新築された東京、丸の内、通称「丸ビル」7階に本社を移した。この効果は、てきめんである。まもなく遭遇した関東大震災にさすが丸ビルはビクともせず、以後社業は順風に乗る。

ぼくは、事業本部長。北洋漁業現場二二六〜一九〇漁区の生産を統括、新造した新鋭巡航艇に乗船、延長六〇〇軒の全漁区くまなく巡回。社員、従業員を励ましなが、艇内のぼくの特装室に名人コックを乗船させて腕をふるわせた食事と彼等と語りあうのを楽しみにした。

社員たちが、ぼくを如何に評したか、自分のことは言えないので語ら

ないことにする。

さて、次表に見られる通り大合同後三〜四年の業績は低調、これには天災的な受難と試験が加わつたが、その二、三を次に述べる。

大正十一年八月、西海岸にわが社の缶詰工場が集中するオゼルナヤで

日魯漁業の収益と株式配当

年度	総収入	利益金	配当率	資本金	払込資本
	千円	千円	%	千円	千円
大正11	19,030	1,623	10.0	17,000	12,600
12	14,733	1,099	7.5	"	"
13	16,658	1,278	7.5	"	"
14	16,404	1,571	9.5	"	"
15	31,186	4,180	21.0	"	"
昭和2	27,177	6,095	30.0	"	16,993
3	38,868	7,282	22.5	40,000	22,750

(註) 1期6ヵ月決算であるが年計に集計した。

日魯漁業株式価推移

時期	最高	最低
	円 銭	円 銭
大正11	37.00	19.80
" 12	41.10	17.60
" 13	38.40	19.80
" 14	51.20	35.60
" 15	152.20	49.50
昭和2	136.70	88.90
" 3	125.00	95.00

(東京証券取引所)

工作中的の失火が大火災になる。同期の製造缶詰を船積みする直前、約三万函(一函は一ダース一二缶の八ダース・九六缶入り)、これに工場と機械設備の七〇%を失った。

この火災を遠望した軍艦「新高」は、革命に便乗したバルチザンの無法行為による焼打ちを警戒。漁区沖に碇泊し災害確認をした翌朝、猛烈な暴風雨と激浪のため暗礁に激突、沈没という惨事になった。わが社員必死の救援隊が一三名を救助。特務艦による活動もあったが残念にも古賀大佐艦長ほか百余名痛恨の犠牲を見るに至ったのである。

翌十二年三月、東海岸に大津波襲来、漁期を目前に缶詰工場、これに漁夫、工員の宿舍すべて波浪にさらわれ、幸い人員は避難、最後まで頑張った無線所員も奇蹟的に波浪で山に押し上げられ命拾い。この災害で同年の操業生産減は大きかった。

以後の日魯業績は、世間の不況にかかわらず着実な経営をつづけ大正十五年は前年比二七〇%の利益金を計上した。翌昭和二年は前年比五〇%増、翌三年は一五%増と、連年高率の収益がつづいた。社員の半年期賞与に六カ月分支給をつづけても、なお前年を更新する高収益である。

このため大正一五年下期から株式配当三割を昭和二年上、下期の三期連続した。この高率配当は各界から注目を受ける。昭和三年利益一二%増になるが増資によって二二・五%配当に減じた。この時点で大阪株式市場で日魯株の売り、買いが激しくなり、その内容が単なる株の利喰いでない陰謀的な操作が感じられた。なお、この日魯株の動きは東京株式取引所にも始まった。

折柄、ロシア革命後の日露漁業協約の見直し改定による漁区競売が、昭和四年四月、ウラジオストクで実施となる。これに、わが社から平塚常務が出張し、漁区入札に当った。入札による漁区移動が生じると露領事業の安定は保持されない。これはロシア側にも、よく認識されており従来その変動は殆どなかった。このため若干の応札価格改定を前提にする入札慣行が相互に了解されていた。しかし今回の入札開始直前になって従来全然知られない新人参加によって一挙に予定価格の三〜五倍という高値入札が行われ、しかもその漁区は日魯の好漁場として長期設営の七八漁区である。日魯は、これ以外の二三漁区を落札できたが、前者の七八漁区を失うことは会社の死活にか

かわる重大事である。ロシア側にも意外で不安を見せたが、厳格に実施された適法の入札を否定できず、以後の事務的な入札者の信用調査と入札額の払込みによって確定する。

この事態は平塚によって東京本社に電信報告され、早速全役員が東京に集合、平塚常務の帰国を待った。

直ちに事実調査の結果は、旧日魯の所有者であった長州閥の久原房之助の系列による新日魯の好調業績を奪取せんとする陰謀と判明。企業秩序を無法に侵害した行為とされる。

日魯は、檀野専務が直ちに農林大臣に報告、不法行為の停止を要望。これに山本農相は監督官庁として無法者の行為を行政処分によって無効にし、ロシア側にも連絡して入札後の契約停止を要請する意向を表明。これは日魯側も当然の措置と了解、その進行を静観することにした。

平塚の帰国、現地の詳細が判明するにつれてロシア側の善処を日本政府の正式連絡で期待したのである。

しかし、陰謀者の根は意外に深く大阪証券取引所理事長の島徳蔵が株式操作の張本人で、しかも現政府の総理兼外相の田中義一が日魯経営による政治資金源にする意途まで判明した。このため、ロシア側から高額

入札者について信用照会があったのに外務省は即座に「信用あり」と回答をしていることが判明。こうした事件の黒幕がわかると、当初の日魯からの要請に理解を示していた農林省の山本農相も田中総理の意をうけるに及んで、初期に示した対応が反転するという状況になった。

こうなると行政に頼る効果は全然ないと、役員全員が途方にくれた。檀野専務が、ぼくに杉山茂丸さんを頼んでくれと要望。堤会長、平塚常務も是非に頼むという。

ぼくは、箱根の杉山邸に走った。杉山さんは「日魯も有頂天になり過ぎたようだね。よくわかった。こんな場所に関係者の足を運ばせるのは気の毒だ。丸の内の帝国ホテルを十室ほど借り切れ。すぐ行くよ」となった。その手配をみると、杉山さんは、すぐ帝国ホテルに移って、まず君のところの堤(会長)を呼べ、と。

「国益事業をあずかる君たちのざまはなんだ。今回のことは、日露役員すべてが惹起したものだ。とくに君は責任者として天下に謝し、役員総辞職せよ」と、語気も荒らく叱責。ぼくも聞きながら反省、冷や汗が出る思いであった。真藤は給仕にするから当分ここに詰める。堤君は会社

能古博物館だより

に帰って、ぼくの話役員諸君に伝えよ、と。会長を追い立てられた。

堤会長は、四月二十二日役員会を開き、杉山さんの言葉を披露。すぐ会長自身の退任を表明。事件全面の解決を杉山さんに一任すると全員の同意を求めた。翌二十三日朝、帝国ホテルを訪ね、杉山さんに解決を全面委任。自分の会長職

辞表を杉山さんに提出した。

堤会長は自分の辞職で、会長、社長が空席となるので義弟の平塚を社長にと考えていた

が、一応杉山さんは役員全部の辞表を預かる、当分会社運営は取締役の合議制でやれ、と役員人事を棚上げされた。

また、田中首相と北洋漁業を主管する山本農相を訪問、日魯から事件関与を自分が一任されたと通告。

翌日、田中総理は帝国ホテルに杉山さんを訪問。「自分は本事件に絶

対に関係なし」と言明。

杉山さんは「ウラジオストクの入札者についてロシアからの照会に、総理が兼任される外務省に「信用あり」と返電させられましたね。この男のいかかわしい素性もわかっていますよ。すぐ山本農相に本件の早急な円満解決を総理からお命じ下さい。



真翁書「寿・亀の如し」

御承知の通り北洋漁業は、日露戦で国民が尊い血を流して得た国権国益です。ただ金儲けの手段にして政治資金を得る奴に、この事業は絶対に任せられません。日魯側にも会長以下全役員、杉山が辞表を書かせ、ここに預っています。

相手の久原君や、島にも手を引かせて下さい。そうでないと総理に悪いと、杉山は思いますね。……と話されたようである。この話は、ぼくに席をはずせ、といわれて全く話を聞いていない。ただ、数日後、大阪の島徳蔵をよばれての話で、田中総理にもこう話したよ、と付言されたこととで思い当る内容である。

読者のコーナー

◎たくさんのお手紙をいただきましたので、その中から紙面の許す限りご紹介させていただきます。

○素晴らしい旧家のペン画カレンダーがありがとうございました。我が世代の目に親しんだ葉音屋根の感触は、最早滅多に見ることのできない貴重な存在となりました。

御説の通り、我々の幼なかりしよき時代、少年倶楽部の山口将吉郎、伊藤彦造画伯等による若き颯爽とした侍の挿絵は、少年の血を湧きたたす不思議な魔力を持っていました。現代の雑誌とは天地の差、清潔そのものでした。又、少女雑誌の高島華宵による可憐な少女の瞳は今でも目に焼きついていきます。

久し振りに素晴らしい芸術を見せたいいただき懐旧の情一入です。表紙の「水郷柳川」の絵など額に入れれば写真と一味違い、これまた素晴らしいものになりそうです。

福岡市 村上靖朝

- 【東京都】吉川千秋様【横浜市】真藤嘉世子様【厚狭郡】石田嘉子様【北九州市】稲毛博子様【飯塚市】衛藤幸子様【福岡市】赤木幸郎様・今井美恵子様・大神敏子様・片桐寛子様・高木寛様・田畑俊幸様・田部光

子様・鶴田スミ子様・疋田彩子様・古野開也様・結城進様【久留米市】倉富延朗様【大牟田市】吉田恵美子様

ほかの皆様よりお手紙をいただきました。ありがとうございました。

図書受贈

○沖双葉氏より／みなづき句会発行「句集みなづき」

○後藤新治氏より／美術展図録多数

○姪浜川柳会より／会誌90・91・92号

○神奈川大学日本常民文化研究所より／歴史と民俗8「民具マンズリー」第24巻

○川喜田敦氏より／厚皮着著「逃亡記」・「川喜田敦作品集I」

この場を借りてお礼申しあげます。



つわの花 (当館国内)

能古博物館だより

杉山さんは、島徳蔵に「北洋漁業の成り立ちは知っているだろう。日本の戦死将兵十万人、国費三十億を消費して戦勝国になったが、ロシアからの賠償金は取れず、ようやく露領漁業権を確保した、いかなれば国益事業だよ。君たち株屋にもこの位

「商売には損もある。株が下ったと

「商売には損もある。株が下ったと

思いなさい。イヤならいいよ。君がそれで表に出てみなさい。愛国の士が待っているかも知れないね。腕一本折られてすめばよいと思いなさい」

翌日は、日魯の在京役員が呼ばれた。堤、檀野、平塚、ぼくの四名で

「どないも、こないも、こないよ。これに署名しなさい」と、一枚の紙を出された。これはロシア政府宛の漁区入札放棄の文面、これにウラジオストク総領事に当てた漁

「協賛会会員(個人)」

亀陽文庫・能古博物館友の会

- 【福岡市】天谷千香子②・西嶋洋子②・岡部六弥太②・笠井徳三②・坂田泰盛②・鬼塚義弘②・村上靖朝②・片倉静江②・星野万里子②・桑形シヅエ②・速水忠兵衛②・亀井准輔②・小田一郎②・三好恭嗣②・吉村雪江②・財部一雄②・重松義輝②・橋本敏夫②・田上紀子②・古野開也②・三宅碧子②・安松勇一②・上田良一②・西村忠行②・高田浩二②・近江福雄②・片岡洋一②・桑野次男②・玉置貞正②・山内重太郎②・星野金子②・石川文之②・木戸龍一②・中畑孝信②・森藤芳枝②・金江たま子②・中村紀彦②・西川眞澄②・岡本金蔵②・青柳繁樹②・黒川邦彦②・荻原ヨネ②・片桐寛子②・岩重二郎②・西島道子②・宮 徹男②・原 重則②・石橋七郎②・横山智一②・末松仙太郎②・藤木充子②・板木継生②・吉原湖水②・和田慎治②・行成静子②・池田邦夫②・野間フキ②・浦上 健②・宮崎 集②・都筑久馬②・吉村陽子②・齊藤 拓②・長 正彦②・鍋山駿一②・石橋観一②・桃崎悦子②・西 政憲②・江島寿人・鬼木善夫・岩下須美子・吉長秀子・安永友儀・土屋正直・山口朱美・磯崎啓子・大庭祥生・森 真吾・森岡 栄・三角健市・織田喜代治・伊奈義之・甲本総太・渡辺俊江・岸 洋子・大串 梓・林十九楼・古賀清子・前田静子・田中和子・上田 博・大神敏子・近藤 絃【大野城市】伊藤泰輔②・田代直輝②・藤 穂積【春日市】後藤和子【筑紫野市】横溝 清②・脇山浦一郎②・川浪由紀子②・原 富子②【太宰府市】石田秀利②・中村ひろえ②・古賀謹二②・有吉林之助②・佐々木謙②・吉田案山子

- ②・大谷桂介②・平岡 浩・西尾弘子【筑紫郡】荒井 昇②・与那嶺三郎②・西村久夫②・添田耕造②・結城慎也③②【粕屋郡】斎藤良一②・神崎憲五郎②・榎田正己②・榎田猶子②・酒井俊寿②・青木良之助②・安武房子・松本雄一郎・友野 隆【宗像市】大島成晃②・原田國雄・木村秀明【甘木市】佐野 至②・酒井カツヨ②・具嶋菊乃②・宮崎春夫②・井手 太②・井上 清②・田中トク工②・富田英寿・床島 静【朝倉郡】鬼丸雪山②【糸島郡】由比章祐②【飯塚市】小山元治②【浮羽郡】吉瀬宗雄②【大牟田市】嶽村 魁②・古賀義朗②・杉原守【苅田町】木下 勤②【北九州市】平野 巖②・片桐三郎②・石垣善治【久留米市】野田正明②【直方市】山本利行②【柳川市】庄野陽一【八女市】松延茂【佐賀県】甲本達也②【熊本県】浜北哲郎②【山口県】大塚博久・平野尊識【兵庫県】大柳孝太郎②【大阪府】小山富夫②②【滋賀県】小堀定泰②【愛知県】杉浦五郎②・庄野健次【神奈川県】中野晶子②②【東京都】片桐淳二②・山根貞与②【千葉県】森 久【石川県】丸橋秀雄【宮城県】田中信彦②【北海道】船越谷嘉一

【協賛会会員(個人)】

- 片桐寛子(福岡)②・緒方益男(佐賀)②・中村俊隆(福岡)②・中山重夫(佐賀)②・西村光俊(東京)②・大里豊男(福岡)②・梅田光治(福岡)②・広瀬 忠(福岡)②・今林 昇(福岡)②・大久保津智夫(霧穂)②・永田蘇水(福岡)②・大坪正治(福岡)②・野口一雄(福岡)②・伊藤 茂(芦屋市)②・白水義晴(東京)②・立石

白紙に戻された。これで日魯の復権となり漁区租借料は前年の三〇%割増しで長期契約が成立した。この解決は、全国の新聞報道に乗った。

日魯の社員たちは、解決がなくとも自分たちは出漁すると、準備をしており快報が届くと函館の町中が歓声をあげたという。ぼくは、杉山さんの命令で日魯の負担を島派に支払うまでホテルに滞在した。

いよいよ、すべて終わって、杉山さんから日魯の社長を外務、農林両省と相談して決めたよ。君は、誰と思うかね、と聞かれた。檀野専務ですかと言うと、堤は予定通り責任を取って退任だ。檀野専務は留任、常務は平塚君と君だ。この三人で当分やれよ。社長は、その内にわかる。

昭和四年は、出漁期一カ月おくれがひびいて減産六〇%。もちろん十一月決算は大欠損、これで例年の高配当は消えた。それでも前期繰越金で六%配当、翌期は無配に転じた。

年末の十二月二十五日になって新社長が決定。なんと、ぼくの恩師ともいふべき川上俊彦さんである。

人生の奇縁、又ここに体験。すべて天与以外にない事実である。川上さんは三年前に外務省退官。この方のロシア通は省内でも知られ、また

旅順の戦いやんで乃木、ステッセル両將軍会見の名通訳も有名である。

さて、思わず長く語ったが、もうこのへんで勘弁を願おう。

終りに一言。これは北方四島のことでだ。ぼくは北千島漁業㈱の社長もやった。その本社所在は、四島の最北に位置するエトロフ島だ。北海道庁所管で登記等もされた。幕末の有名な近藤重蔵の足跡と彼の建碑もある。なにより安政元年十二月、日露和親条約でエトロフ島の沖合いウルップ島との中間海面を国境に決定されているではないか。

ぼくの北千島漁業㈱では、これを領海に操業したものだ。

いま、日本政府は、こうした事実をもっと国民に教えるべきだ。

ハポマイ、シコタンで小さく考えてはいかんね。エトロフ島これは日本中で最大の島である。

対馬や淡路島は半分もない。海産鉱業資源も多いところだ。

絶対、日本固有の領土である。
(終わり)

※本誌3号から始まった亀陽文庫の創始者「真藤慎太郎」先生の聞き書きは、ここで一応終えます。時期を得て続編を掲載いたします。

●筆者 庄野寿人 鮫島陽文庫理事長

武泰(福岡)②・木原敬吉(福岡)②・菅直登(福岡)②・奥村宏直(福岡)②・荒木靖邦(福岡)②・多々羅幸男(千葉)②・早船正夫(福岡)②・江崎正直(大牟田)②・七熊澄子(太宰府)②・七熊太郎(佐世保)②・七熊正(佐世保)・庄野直彦(直方)・安陪光正(福岡)・浄満寺(福岡)

【協賛会会員(法人)】
流通共済(株)・花田積夫(福岡)・タイム社印刷(株)・安部栄一(福岡)・株笠(株)・組笠(株)・忠夫(福岡)・博多ちくわ・株魚嘉・松尾嘉助(福岡)・権藤税理事務所・権藤成文(福岡)・協通配送(株)・今林昇(福岡)・大牟田運送(株)・山誠次郎(福岡)・山谷運送(南)・山谷悦也(東京)・山三島設計事務所・三島庄一(福岡)・西尾トラック運送(株)・西尾秀明(福岡)・日西物流(株)・原重則(福岡)・東洋特殊機工(株)・西尾敏明(福岡)・橋詰工務店・橋詰和元(福岡)・愛宕建設工業(株)・野村六郎(福岡)・九州三菱ふそう自販(株)・宮崎慶一(福岡)・南愛光ビルサービス・野田和禧(福岡)・南クリーン開発・野田和禧(福岡)・延寿産業(南)・池田邦夫(福岡)

※新規の御加入(先号以後、一月十日まで)は、右の地区ごとに記載いたしておりますので、何卒御芳名を御確認下さい。ありがとうございます。

友の会 年間3千円
(館の活動、館誌購読と催事企画に参加)

能古博物館の会

自然と文化の小天地創造
協賛会(個人) 年間1万円
〃(法人) 年間3万円
館維持、資料収集、施設整備等の資金援助を受ける

納入方法 郵便振替 福岡3160970
財団法人 能古博物館
右の会費受領は、その都度本誌に掲載以後会費相当期間を名簿にします。

お願い ご送金は振替用紙(送料加入者負担)をご利用下さい。用紙はご連絡次第お送りします。
当博物館の活動、また絵画・古文書資料など当館に皆様のご支援をお寄せ下さい。

会員各位の特別企画展のご案内
来る4月7日〜6月28日の特別企画展「江戸後期筑前蘭画展」は会期中の一般入館料は五〇〇円になりますが、友の会、協賛会の会員各位は次の通り、ご入館いただけます。

- 友の会・ご同伴一名まで無料
- 布装図録三千円を二千元に割引
- 協賛会(個人)ご同伴一名まで無料
- 右の図録一冊を送呈
- 協賛会(法人)ご同伴二名まで無料
- 右の図録三部を法人宛に送呈、また招待入場料と案内パンフ各二〇枚お送りします。ご関係各位にご贈呈ください。
- ご来館は数次ご随意に

能古自然を歩く会

当館恒例「能古自然を歩く会」を昨秋10・11(金)、10・23(水)、11・9(土)、11・24(日)、12・8(日)と計五回に亘って催しました。

11時当館研修室集合。

11時20分出発。(壇一雄旧宅・白鬚神社・自然遊歩道・壇一雄絶筆碑・思案の森・展望台等、全コース約6km)。

13時20分当館到着。
13時30分昼食「能古の幸」
14時講話。



楽しそうに歩くみなさん/10月11日



研修室での聴講風景/11月24日

15時30分喫茶、解散。

歩くコースについては当日の天候により多少変更しました。

10・11『亀井学と亀井少栗』講師 庄野寿人 (当亀陽文庫理事長)

10・23『仙崖』講師 中山喜一郎(福岡市美術館学芸員)

11・9『高取焼の歴史と作付』講師 尾崎直人(福岡市美術館学芸員)

11・24『中国文化―論語を中心に―』講師 町田三郎(九州大学教授)

12・8『自然と風景画』講師 後藤新治(西南学院大学助教授)

当日は、ほぼ好天にめぐまれ、汗をかき息をはずませながらも、皆さん能古の風景を充分お楽しみ頂いたと思います。そして、昼食を皆さんの講話の時間も、講師のお話を熱

心にお聴きくださり、館員一同喜んでおります。今後も改善を重ねながら「歩く会」を続けたいと思っておりますので、ご意見ご要望をお聞かせください。



歌碑の前で記念撮影/12月8日

展示品紹介

- 第1展示室(12月26日入替)
- 古高取茶道具銘品
- 高取床飾(置物)ほか
- 第2展示室(12月27日入替)
- 亀井家資料(南冥大書六曲一双の屏風・21歳作)

能古博物館ご案内

開館 9:30~17:00 (入館16:30まで)
 休館日 毎週月曜
 (月曜が祝日の場合は次の日)
 12月29日~1月2日
 入館料 大人300円・中高生200円
 交通 姪浜 能古行渡船場→フェリー(10分)
 →能古(徒歩5分)→博物館
 〒819 福岡市西区能古522-2
 ☎(092) 883-2881・2887
 FAX(092) 883-2881

編集後記

本文にてご紹介しております「筑前閨秀―亀井少栗―展」は、当館開館以来初の企画展です。園内の桜の開花とともに無事開催できる日を楽しみに一同準備に励んでいます。

- 書法帖、文房具類
- 廻船模型、姪浜廻船資料
- 第3展示室
- 当館製作ビデオを放映、筑前閨秀展(4月)の準備室として使用
- 現代郷土美術館
- 多々羅義雄の絵画 1階
- 谷口コレクション 2階
- 展示室増築着工(3月完成予定)